

英語教育促進のための地域活性化活動  
**Community Service Activities to Enhance  
English Language Education**

山田 大介、大場 智美

Daisuke Yamada and Tomomi Ohba

**要旨:** 多摩大学グローバルスタディーズ学部では2016年に中学校・高等学校（英語）の教職課程を設置して以来、教員免許を取得する学生は少ないものの、近年では公立学校教員採用試験に合格者を出している。本稿では、2020-2021年度に教職課程受講生が参加した地域活性化活動を紹介するとともに、地域活性化活動に積極的に参加した教職学生が在籍年数と共に遂げた変化を検証し、そしてそれが教育実習を円滑に行う力の育成に貢献したのかを吟味した。

教職課程を受講の4年生2名にインタビューを行ったところ、地域活性化活動に積極的に参加したことにより、傾聴力が高まったり、リーダーシップ力が高まったという結果になった。今後の課題として、教職課程受講生に対して常に教師になる動機付けを行うには、更なるスクールボランティアや英語を教えるボランティアの増加の必要性が浮き彫りになった。教師力向上には、大学の講義だけにとどまらず、学外に向いて社会に参画し経験を積み「創造的な探求力」を育む必要があるだろう。

**キーワード:** 教職課程受講生、地域貢献、英語科教育法、教育実習

**Abstract:** Since School of Global Studies, Tama University established a course of secondary school teacher-training of English language in 2016, a number of students have passed public school teacher employment examinations in recent years. In this article, local community services in which students in the training course participated in 2020-2021 are introduced, and there is an interview of two students who actively participated in those programmes. It reveals that their active participation improved their competence of listening to other people's opinions and also their leadership skills.

it is necessary to increase the number of community services related to schools and teaching English to keep motivating students in the teacher-training course. To enhance students' teaching skills, it will be necessary not only to give lectures at university but also to let them go outside and participate in society to gain experience and develop "creative inquisitiveness".

**Keywords:** Students in the teacher-training course, community service, English Language Pedagogy, teaching practicum

## 1. はじめに

多摩大学グローバルスタディーズ学部（以後、本学部）では、2016年に高等学校教諭一種免許（英語）および中学校教諭一種免許（英語）の教職課程を設置し、順調に教員採用合格者を増やしている。本学部に入学者を目指す学生数を、1年次に履修することが多い「教職概論」などから算出した場合、入学者数の概ね1割から2割程度が教職科目を履修している。一方、卒業時に免許を取得する学生は2名から8名程度であり、母数こそ少ないものの、近年は私立学校だけではなく公立学校教員採用試験に合格者を出している（表1）。

表1 多摩大学グローバルスタディーズ学部教員採用状況

卒業年度	教員免許取得者数	教職への就職状況
2017年	4名	私立中学・高等学校専任教員1名
2018年	2名	なし
2019年	8名	私立高等学校常勤講師2名、神奈川県中学校臨時任用教員3名
2020年	3名	横浜市中学校専任教諭（中学校・英語）1名
2021年	2名	横浜市中学校専任教諭（中学校・英語）1名

本学部は教育学に特化した学部ではないこともあり、大学1年次からの教職課程の履修開始以降、単位数の多さや科目の難しさを理由に履修を挫折してしまう学生が多い。そこで、本研究は教職課程受講生の素養を育て上げ、教員採用試験に合格出来る十分なコミュニケーションスキルと指導力育成を目指すことを目的に行われた。

今日、教職課程を設置している大学では様々なボランティア活動やインターンシップを斡旋し学生を育てている（林2015、鬼頭2018）。本学部ではこれまでに、教職受講学生を中心とした「とにかく親子でサイエンス」教室（2016-2018年）、六会公民館主催「われら少女少女体験隊・多摩大生から英語を学ぼう！」（2019-現在まで）、藤沢市市民講座（2018年）など、教職課程で得られた知識を元に講座を開催し、地域に貢献してきた。また、教職以外にも学生会主催で六会中学校「English Café」（2016-現在まで）など、活発な地域活動も行われている。本研究では、地域貢献活動に積極的に参加した教職学生が、在籍年数と共にどのような変化を遂げたかを検証し、そしてそれが教育実習を円滑に行う力の育成に貢献したのかも吟味する。

## 2. 活動内容

本学部産官学民連携委員会から紹介を受けたものや、入試課からの依頼を受けた入学前

教育、および教職課程に関連する学術交流が中心である。2020年から2022年度現在まで、コロナ感染症拡大の中で、大きな制限を余儀なくされたものの、可能な限り様々な活動に関わり、または提供してきた。2020年4月から2022年3月までに行われた主な活動は次の通りである（表2）。

表2 教職学生が参加した地域活性化活動

	日時	内容
1	2020年10月31日	「あだち子ども食堂たべるば」江ノ島スタディーバスツアー（教職課程在籍の2、3年生参加）
2	2020年11月4日	横浜市立もえぎ野小学校訪問、外国語（英語）授業見学と意見交換（教職課程在籍の3年生参加）
3	2020年12月9日	神奈川県立藤沢清流高等学校訪問、英語授業見学と意見交換（教職課程在籍の2、3年生参加）
4	2021年7月30日～8月1日	第49回藤沢JC杯・小中学生サッカー大会（教職課程在籍の3年生参加）
5	2021年9月26日	第一回SDGsマルシェ、オンライン（教職課程在籍の3年生参加）
6	2021年12月18日	多摩大学グローバルスタディーズ学部入学前学習プログラムにて、入学予定学生の英語指導（教職課程在籍の1-3年生参加）
7	2022年3月5日	藤沢市立長後中学校、SDGs発表補助（教職課程在籍の3年生参加）

項目1は江ノ島フィッシャーマンズプロジェクト、江ノ島片瀬漁業協同組合、藤沢市観光協会のご協賛のもと、多摩大学本学部第1期卒業生が運営する「あだち子ども食堂たべるば」のこどもたちのために「江ノ島スタディーバスツアー」を開催した。

項目2、3に関しては、「英語科教育法Ⅱ」の科目に絡み、2020年度からの小学校での外国語（英語）教育の必修化に伴い、起こっている変化を身近に体験してもらうことを目的とし、横浜市立もえぎ野小学校（大杉昭雄校長）に依頼し実現したものである（2020年11月実施）。実際に「英語科教育法」履修者である教職課程3年次の学生らが中心となり、小学校5～6年生の検定教科書を使用した外国語授業と、国際理解教育授業を計3時間見学させて頂いた。また、2020年12月には、神奈川県立藤沢清流高等学校の小島昭彦教諭のご配慮により、教職課程の3年生の学生を中心に、当校の高校1年生の英語授業の見学をさせて頂き、その後に授業内容に関する説明と質疑応答の時間を設けて頂いた。

項目4は、藤沢青年会議所（Junior Chamber, 略称JC）が1974年から行っている小・中学生サッカー大会である。本学部は2018年度より学生が実行委員会に加わり、大会の企画・運営に関わっている。学生はJC関係者らと共に、実行委員会においてサイドイベントの検討等を行ったり、当日の会場設営・撤去、グリーンカード審査に当たるなど、大会を盛り上げた。

項目5はSDGsに関連する商品を預かっている民間企業や、SDGsについて学んでいる藤沢市内の3大学（多摩大学、慶應大学、日本大学）の学生、ならびにSDGsに関連する活動をしている民間人が参加し、SDGsについて広く知ってもらおうという趣旨で始まったイベントである。2021年に発足し、本学部生の役割はイベント全体の企画、広報、資金調達（クラウドファンディング）、T-shirtからエコバック作り、そしてジェンダー関連クイズに参加し、発表を行った。第一回はコロナ禍のためオンラインで開催された。

項目6は本学部入学前学習プログラムにて、1年次に受講するAcademic English Program担当教員5名と教職課程受講生1-3年生6名がペアを組み、入学予定学生の英語指導を行った。2022年度入学予定者のうち、2021年内に入学手続きを行った総合型選抜と学校推薦型選抜合格者（約100名）が集まり指導を受けた。

項目7は地元の中学校からの依頼である。中学校と商店街共催の地域活性化イベントで中学生が持続可能な開発目標「SDGs」について3年間学んだ学習の成果を披露する「長後SDGs縁日」が開かれ、本学部生が活動をサポートした。

その他にも、本項目における活動内容と関連するスクールボランティアがある。神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会にはそれぞれ、教員養成のための教師塾が開講されている（それぞれ、かながわティーチャーズカレッジ、よこはま教師塾「アイ・カレッジ」）。本学部生は、2019年度に1名、2020年度に1名、2021年度に3名が上記教師塾を修了し、教員採用試験に臨んでいる。アイ・カレッジ修了者は横浜市教員採用試験1次試験が免除、かながわティーチャーズカレッジ修了者は神奈川県教員採用試験の1次試験の一部科目が免除される。かながわティーチャーズカレッジは本学部近隣の神奈川県立総合教育センターで開催される。こうしたことからグローバルスタディーズ学部教職課程では、上記カレッジへの応募時の指導を行うなどして、積極的に両カレッジへの参加を推奨している。また、両カレッジでは9月から翌3月末までの7か月間、毎週日曜日に講義が開催されるだけでなく、カレッジが指定する近隣公立中学校・高等学校でのボランティア活動も義務づけている。さらに学校で行うボランティアにおいては、2019年度から横浜市立根岸中学校の計らいにより、本学部生が継続してアシスタントティーチャー（AT）や学校ボランティアを行ったり、横浜市内の小学校の外国語授業のATを行っている。

### 3. 教職学生のインタビュー

地域活性化活動に貢献した教職課程学生に対し、その活動がいかに自身の「教師力」向上に役立ったのかを検証すべく、地域活性化活動に積極的に参加した学生2名（現4年生、男女1名ずつ）から、活動内容と自身の変化に関するインタビューを行った。

インタビューの主な質問は下記である。

Q1: 大学4年間で行った地域活動の内容はどのようなものか。

Q2: 地域活動は自身の「教師力」に貢献したか。貢献したとしたらどのような形か。

Q3: 大学のシステムとして、教職課程や産官学民連携活動に必要なことは何か。

まず背景として、男女学生共に1年次からボランティア系サークルに所属していた。女子学生はボランティア系サークルAに所属し、定期的（コロナ禍は除く）に大学近隣の私営の幼稚園児・保育園児向けの子ども英会話教室や、同じく近隣の高等学校英語部で英検対策やリーディングに特化して教えるボランティアを行っていた。サークル活動の一環で産業フェスタにも参画し、幼稚園生から大人までの英語教室を開催した。内容は会場内の道案内を英語で教えた。

男子学生もボランティア系サークルBに所属していた。このサークルは海外の貧困支援が主軸だが、コロナ禍で渡航することが出来ず、代わりに神奈川県内のホームレス炊き出し支援を月に1度行い、ある時は本学部生から洋服の寄付を募り、服を渡したこともある。他には、東京都の児童養護施設の建物が壊れたのでその修理や、チャリティランを他大学の学生と一緒にいった。

### 3.1 大学4年間で行った地域活性化活動の内容

本学部の産官学民連携委員会および「I Love 湘南プロジェクト」<sup>1</sup>から紹介を受けた地域活性化活動について述べると、女子学生は2021年に第1回SDGsマルシェでジェンダークイズを開催した。2022年6月には対面開催で第2回SDGsマルシェを実施し、無農薬野菜、フェアトレード商品、ならびにハンドメイドの虹色<sup>2</sup>の商品を売った。他にも、1年次に藤沢Foodies多言語メニュー作成（英語）や、4年次には近隣のこども食堂支援も行っている。

男子学生は「第49回藤沢JC杯・小中学生サッカー大会」に参加し、企画・運営およびサッカー大会当日はファインプレーを行った生徒にグリーンカードを渡す役目を果たした。また、1年次に「湘南台フェスタ」（藤沢市湘南台駅周辺で行われる祭り）に2回参加、他には近隣の中学校の文化祭でイベントを主催したり、シンガポールから本学部に短期研修に来た留学生の鎌倉観光を案内した。

さらに、両学生とも本学部卒業生からの依頼で、東京都にあるこども食堂の江ノ島バスツアーに参加し、こどもの見守りやレクリエーション指導を行った。

女子学生は前述の教師塾である「かながわティーチャーズカレッジ」に合格し、3年次にボランティア部門スクールライフサポーターとして、近隣の中学校で相談室登校学級の支援を行った。各クラス1,2名支援を必要とする生徒がいるので、授業によっては生徒のサポート、授業中に飛び出す生徒のケアなどをサポートしたり、また横浜市のアシスタントティーチャーとして特別支援クラスのある学校で半年間、週1回ボランティア活動を行った。

### 3.2 地域活性化活動と教師力

両学生とも「地域活動は自身の『教師力』に貢献したか」という問いには肯定的であった。女子学生からは、地域活性化活動やスクールボランティアを通じて、傾聴力が高まり相手に寄り添う態度が増したという意見が出た。彼女は大学に入学した頃は他人の話聞くのが苦手だったが、学年が進むにつれ、周囲の学生からも傾聴力が高まったと言われるようになったそうである。また、人は年齢やバックグラウンドが違くと理解力に差が出るのだと知った。女子学生曰く、自分自身にはこどもが好きという気持ちはあったが、具体的などのようなところが好きなのかという明確なところがわからなかった。しかし活動を通じて、それがこどもの素直さであったり、吸収力の高さ、色々な価値観を持っているのが理解できるようになった。彼女はすべての活動を通してこどもの成長に関わる仕事したいと思うようになり、教師になりたいという気持ちが高まったそうである。

一方、男子学生は、教育実習時に英語だけではなく、道徳や総合的な学習の時間などの授業計画を行う際、考え方が広がったとのことだった。「JCサッカー杯」ではリーダー役だったので、そこからリーダーシップが取れるようになった。その他にも、シンガポール研修の留学生との交流を通じて、シンガポール英語（シングリッシュ）に関して教育実習の授業中に少し話せたりなど、地域活性化活動やボランティアでの色々な人たちとの関わりが教師力につながった。男子学生曰く、学校には勉強が出来る子、出来ない子、裕福な家庭の子やそうではない子など色々な子たちがいる。地域活性化活動で出会った野宿者たちは使える物を非常に大事にするので、それに近いことをこどもが行った時に、「もしかしたらこの子の家庭は貧しいのでは…」というような、こどものプロファイリングに役立ったとのことである。

### 3.3 地域活性化活動の課題

教職課程受講生に勧める地域活性化活動に関して尋ねた時、女子学生からは「地域のこどもの家庭サポートが出来るボランティアの紹介を増やしてほしい」との意見があり、男子学生からは「こどもたちと関わるもの、留学生や海外と関わるものの増加」を望んでいた。さらに男子学生は、それ以外にも企業人や社会人との関わり的重要性も述べていた。教師は専門職であり、いったん職についてしまうと、会社員など他業界の人々と関わるのが少なくなってしまうがちである。教師は生徒に「社会はな〜」と説教しつつも、他の社会人が何をしているのかがわかっていないと話に説得力がなくなるので、世間を広く知り、様々な人々と交流をはかるのが大事であるとのことである。

女子学生からは、教職に関わるボランティアが非常に少ない印象があるので、教育関連のボランティアを増やしてほしいとの意見も出た。そのような意味では、近隣のこども食堂支援や大学周辺の小中高等学校関連のボランティアが増えてきたのは望しい傾向と言える。

両学生とも、一部の下級生のみが地域活性化活動を熱心に行っており、全学生に広まり

があまりないのを懸念し、ゆえに地域活性化活動を行った学生の声を広めるべきであると答えていた。女子学生は1年次に、ボランティアを行いたいのが誰に相談したら良いかわからなくて戸惑っていたので、教員が授業のはじめや合間に紹介すれば、学生に周知しやすいのではないだろうかとの提言があった。カフェテリアのTVモニターで紹介するのも有効ではあるが、皆あまり見ていない一方、授業を担当している教員からの直接的な発信には影響力があるので、さらなる教員や学生の口コミからの広がりを加えれば一層効果的であろう。

#### 4. おわりに

インタビューを行った教職課程4年生のうち、女子学生は神奈川県立中学校教員採用試験に合格し卒業後は教員になる予定であり、男子学生は障がい者就労支援施設に勤務予定である。男子学生に、免許取得予定でありながら、教員採用試験を受けずに民間に就職する事に対して尋ねたところ、同じ教職課程の学生はとても英語ができるようになったのに、自分はあまり英語が好きになれず、かつどうしても生徒に教えるということに入れ込むことが出来ず、興味が変わっていったそうである。

教職課程には、卒業直後に教員を目指さず民間で就職しながら、数年後「やはり教師になりたい」と大学を頼ってくる学生がいることを筆者たちは体験から学んでいるので、必ずしも今回教員採用試験を受けなかった学生が一生涯教員にならない（つまり免許が無駄になる）とは限らないのだが、一方本学部教職課程をディプロマミル化させないために、教職課程受講生に対して、常に教師になる動機づけを行う必要性を感じる。インタビューを受けた学生2名に照らし合わせると、スクールボランティアおよび「英語を教える」ボランティアの存在が、その意欲を後押ししているのではないかと推測されるので、このような活動を一層増やすべきである。

ところで、現時点<sup>3</sup>では産官学民連携委員会経由の地域活性化活動と教職課程経由のスクールボランティアが別々に告知されているので、それを一本化してどの学生がどのようなボランティア活動を行っているのかを包括的に把握する部署の必要性も筆者たちは感じた。

西岡他（2014）によると、教師に求められる力量には「教科教育」と「教科外の活動」の二つに分かれており、その二つに共通して横たわるのが「創造的な探求力」である。教員免許を取得する前段階である「英語科教育法」や「教育実習」から効果的な学びを得つつ、教師力を総合的にあげていくには、大学の講義だけにとどまらず、学外に出向いて社会に参画し経験を積み「創造的な探求力」を育む必要があるだろう。

## 注

- <sup>1</sup> 2017年度より地域活性化活動が増えてきて、様々な依頼も多くなっていたことから発足したプロジェクト名称。地域貢献に興味がある学生は「I Love 湘南プロジェクト」メーリングリストに登録し、希望する地域活性化活動があればそれに参加する。コロナ禍の2020年度からは、基本的に新生は全員登録（希望しない学生は免除）している。
- <sup>2</sup> レインボーフラッグはLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの略称）などの性的マイノリティを支援する意味合いを持つ。そこから転じて作られた商品である。
- <sup>3</sup> 2022年10月18日現在。

## 謝辞

過去の教員免許取得者数や就職状況をお調べくださったグローバルスタディーズ学部教務課渡邊陽平課長、I Love 湘南プロジェクトなどの詳細を調べてくださった湘南キャンパス事業推進室小泉徹様、グローバルスタディーズ学部産官学民連携委員長韓準祐准教授にお礼申し上げます。

## 参考文献

- 鬼藤明仁（2018）「教育ボランティア活動と大学生の教師力向上との結び付きに関する考察－横浜国立大学の学生の活動における「ものづくり事例」と学生調査－」横浜国立大学教育デザイン研究第9号。
- 西岡加名恵、石井英真、川地亜弥子、北原琢也（2014）『教職実践演習ワークブック』、p7、ミネルヴァ書房。
- 林一夫（2015）「教員養成のためのボランティアやインターンシップの実態に関する調査研究－鳥根大学、仏教大学、明星大学の3事例を概観して－」明星大学研究紀要－教育学部第5号。